

[6] 特定区間の距離を示す仏典資料

[0] パーリの原始聖典やその注釈書などには特定区間の距離を「由旬」で示すものがある。先に紹介した Vost の “The Lineal Measures of Fa-hian and Yuan Chwang” 中にも、若干触れられていたものであるが、これを現在の実測距離と照らし合わせてみれば、1 由旬の長さが導かれる。もちろんこれらの資料が信頼できるかどうかは別問題であり、また信頼できたとしてもその距離が直線距離なのか、道路距離なのかによって誤差が出る。しかしこれも一つの判断材料にはなるであろう。

[1] まず、以下にその資料を紹介する。

[1-1] 王舎城とガンジス河の間の距離を 5 由旬とするものがある。

ビンピサーラ王は師主（釈尊）がヴェーサーリーに行かれることを承諾されたということを知り、王は王舎城とガンジス河の間の 5 由旬の区間の 1 由旬ごとに精舎を建立した (Rājagahassa ca Gaṅgāya ca antare pañcayojanabhūmiṃ)。(取意) (1)

(1) “Dhammapada-aṭṭhakathā” vol.III pp.439~440

[1-2] 上記資料は続いてガンジス河とヴェーサーリーの間の距離を 3 由旬とする。

5 日経って (pañcahi divasehi) 師主がガンジス河の岸辺に到着されると、王は船を飾って、ヴェーサーリーの人々に「道路を調べ、師主を出迎えよ」とメッセージを送った。ヴェーサーリーの人々はヴェーサーリーとガンジスの間 3 由旬の区間のすべてを (Vesāliyā ca Gaṅgāya ca antare tiyojanabhūmiṃ samaṃ) 飾り立て、ガンジスの岸辺に行き立って出迎えた。(取意) (1)

(1) “Dhammapada-aṭṭhakathā” vol.III pp.439~440

[1-3] 王舎城とナーランダールの間の距離を 1 由旬とするものがある。

「[釈尊は] 王舎城とナーランダールの間の道を歩いておられた (antarā ca Rājagahaṃ antarā ca Nālandāṃ addhāna-magga-paṭipanno hoti)」というのは、半由旬を行って食事しよう (addha-yojanaṃ gacchissāmiti bhuñjitabbaṃ) というような言葉から、‘addhāna-magga’ は半由旬という意味も有する。王舎城からナーランダールの間が由旬であるからである (Rājagahato pana Nālandā yojanam eva)。(取意) (1)

(1) “Sumaṅgalavilāsini” vol. I p.035

[1-4] 王舎城とクシナーラの間を 25 由旬とするものがある。

クシナーラから王舎城まで 25 由旬である (Kusinārato yāva Rājagahaṃ pañcavīsati-yojanāni) (1)。

(1) “Sumaṅgalavilāsini” vol.II p.609

[1-5] クシナーラとパーヴァーの間を 3 ガーヴタとするものがある。

パーヴァーの町からクシナーラの町まで 3 ガーヴタである (Pāvā-nagarato tīṇi gāvutāni Kusināraṃ)。その間の 25 個所で休まれながら、大勇猛心をもって日が没するまでに到着しようと歩かれて、夕刻に世尊は沙羅樹園に入られた (etasmiṃ antare pañca-vīsatiyā ṭhānesu nisīditvā mahatā ussāhena āgacchanto pi suriy'atthamitavelāyaṃ sañjhā-samaye Bhagavā sāla-vanaṃ pavitṭho) (1)。

(1) “Sumaṅgalavilāsini” vol. II p.573

[1-6] 王舎城と舎衛城の間を45由句とするものがある。

給孤独長者は商用 (uṭṭhānakabhaṇḍa) のために友人である王舎城の長者のところに行った。預流果に到達した給孤独長者は、師主 (釈尊) を舎衛城にお招きするための許しを請い、45由句の道のりの1由句ごとに (pañcacattālisayoJane magge yojane yojane) 10万金を投じて精舎を建立した (1)。

(1) “Manoratha-pūraṇi” vol. I p.223

[1-7] 王舎城とカピラヴァットウの間を60由句とするものがある。

王舎城を出発して日々1由句を進み (divase divase yojanaṃ gacchati)、王舎城からカピラヴァットウまでの60由句を2ヶ月で着こうと、急がない旅に出発された

(Rājagahato saṭṭhiyojanaṃ Kapilavatthum dvīhi māsehi pāpuṇissāmīti, aturita-cārikaṃ pakkāmi) (1)。

(カピラヴァットウに近いドーナヴァットウ婆羅門村=Kapilavatthunagarassa avidūre Donavatthubrāhamaṇagāma に住していたブンナ・マンターニブッタの弟子たちは) 自分たちの師匠の教えに逆らわず長老を礼拝してから、次第に遊行して60由句の道のりを終えて王舎城の竹林精舎に行き (anupubbena cārikaṃ carantā saṭṭhiyojanamaggaṃ atikkamma Rājagahe Veḷuvanavihāraṃ gantvā)、十力者の足を礼拝して一方の端に坐った (2)。

(1) “Jātaka” vol. I p.087

(2) “Manoratha-pūraṇi” vol. I pp.202~203

[1-8] 舎衛城とサーケータの間を6由句とするものがある。

その時、30人ほどのパーテッヤ (パーヴァー) の比丘たち (Pāṭheyyakā bhikkhū) は舎衛城に行って世尊にまみえ、そのそばで雨安居に入ろうとしたが到着できないで、道の途中のサーケータで雨安居に入った。彼らは「世尊は6由句よりも近くに住しておられるのに、私たちは世尊にお目にかかることができない (āsanneva no bhagavā viharati ito chasu yojanesu na ca mayam labhāma bhagavantam dassanāya)」と不満に思いながら雨安居に住した (1)。

しかし次のものは舎衛城とサーケータの間を7由句とする。

世尊はチューラ・スバツダ (Cūḷasubhadda) に招かれて、ヴィッサカンマ (Visakamma、一切造者) の化作した5百の高楼に乗って舎衛城から7由句離れたサーケータに行きつつあった (Sāvattthito sattayoJanabbhantaram Sāketam gacchanto)、…

… (2)。

ヴィサーカー (Visākhā) の父のダナンジャヤ長者 (Dhanañjayasetṭhi) はアング国 (Aṅgaratṭha) のバツディヤ (Bhaddiyanagara) の住人であったが、コーサラ国の波斯匿王の頼みによりコーサラに移り住むことになった。波斯匿王はダナンジャヤを連れて舎衛城に行く途中で一夜を心地よい場所に宿営した。ダナンジャヤは王に問うた。

「ここは誰の領土ですか。」「私のです、長者よ。」「ここから舎衛城までどれほど隔たっていますか (kiva dūre ito Sāvattthi)。」「7由句というところです (sattayoJanamatthake)。」「町の中は混雑していて私の従者は多いので、もしお許しいただけ

ればここに住みたいのですが。」 王は「よろしい」と同意して、その場所に町を作って、彼に与えた。その場所で夕方に (sāyaṃ) 住したところが町とされたというところからサーケータという名前が生まれた (tasmim padese sāyaṃ vasanaṭṭhānassa gahitattā nagarassa Sāketam t'eva nāmaṃ ahosi)。(取意) (3)

- (1) “Vinaya” vol. I p.253
- (2) “Visuddhimagga” p.390
- (3) “Dhammapada-aṭṭhakathā” vol. I pp.386~387

[1-9] 舎衛城とサンカッサの間を30由句とするものがある。

(大目犍連) 長老は舎衛城から30由句のところにあるサンカッサの町に (Sāvattitho tiṃsayojanaṃ Saṃkassanagaraṃ) 全ての人々を一瞬の間 (ekamuhuttena) に運んだ (1)。

舎衛城からサンカッサの町まで30由句である (Sāvattitho ca Saṃkassanagaraṃ tiṃsayojanāni) (2)。

- (1) “Jātaka” ‘Sarabhamiga-jātaka’ vol.IV p.265
- (2) “Dhammapada-aṭṭhakathā” vol.III p.224

[1-10] 舎衛城とアーラヴィーの間を30由句とするものがある。

世尊は独りで供をつれないで、衣鉢を携えて道を歩いて (pādamaggena eva) 舎衛城から30由句の (Sāvattithiyā tiṃsa yojanāni) [アーラヴィー=Ālavīのアーラヴァカ=Ālavaka] 夜叉の住所に行って住された (1)。

- (1) “Paramatthajotikā” vol.II p.220

[1-11] ベナレスとブッダガヤの間を18由句とするものがある。

アーサール八月の満月の日に (菩提道場から) バーラーナシーに行こうと、14日 (cātuddasiyaṃ) の早朝、夜の明け方に、衣鉢を携えて18由句の道のりを行く途中で (aṭṭhārasayojanamaggam paṭipanno antarāmagge) ウパカという邪命外道に会い、彼に自分がブッダとなったことを告げて、その日の夕方に (tam divasaṃ yeva sāyaṃ hasamaye) イシパタナに到着された (1)。

仏は最上の等正覚に達せられ、自ら衣鉢を携えて18由句の道のりを行かれて (aṭṭhārasayojanamaggam gantvā)、5人の長老に法輪を転ぜられた (2)。

- (1) “Jātaka” vol. I p.081
- (2) “Jātaka” vol.IV p.180

[1-12] ベナレスとコーサンビーの間を30由句とするものがある。

バックラ (Bakkula) はコーサンビーの長者の家に生まれたが、生まれたその日にヤムナー河で沐浴中に大きな魚 (maccha) に飲み込まれてしまった。その魚は30由句行ってバーラーナシーの町に住む漁師の網に入った (tiṃsayojanaṃ gantvā Bārāṇasīnagaravāsino macchabandhassa jālaṃ pāvisi)。(取意) (1)

- (1) “Manoratha-pūraṇi” vol. I pp.306~307

[1-13] ベナレスとタッカシラーの間を120由句とするものがある。

昔、バーラーナシーでブラフマダッタ王が王として国を治めていたころ、辟支仏たちが菩薩に告げて「王子よ、あなたはこの都では王となることはできません。ここから120由句ほどのところにガンダーラ国のタッカシラーという都があります (ito pana

viṣaṃyojanasatamatthake Gandhāraratṭhe Takkasilānagaram nāma atthi) 。……」
 と言った (1)。

(1) “Jātaka” vol. I p.395

[1-14] チャンパーとミティラーの間を60由旬とするものがある。

昔、ヴィデー八国 (Videharatṭha) のミティラー (Mithilā) の王妃 (devī) に菩薩が宿った。王が戦いに敗れたので、王妃はカーラチャンパーの町 (Kālacampānagara) に逃れようとした。それを知った帝釈天 (Sakka) が馬車に乗せて王妃を運んだ。30由旬ほどのところにある河 (tiṃsayojanamattṭhake ekaṃ nadiṃ) で沐浴した後、夕方にはチャンパーに着いたので王妃はびっくりして、「何をおっしゃるのですか、私たちの町からチャンパーまでは60由旬もあるのですよ (kiṃ vadesi tāta, nanu amhākaṃ nagarato Campānagaram satṭhiyojanamatthake hoti) 」といった。帝釈は「私はまっすぐな道を知っているのですよ (ahaṃ pana ujum maggaṃ jānāmi) 」と答えた (1)。

(1) “Jātaka” vol. VI pp.030~032

[2] 上記を現在の交通路に当て嵌めて距離を出してみると次のようになる。道路のルートとその基礎となった距離は註を参照されたい。また地図上の直線距離も掲げておいた。

資料	区 間	由 旬	直線距離	km/由旬	道路距離	km/由旬
1-1	王舎城 ~ カンガー (1)	5	50	10.00	59	11.80
1-2	カンガー ~ ヴェーサーリー	3	38	12.67	41	13.67
1-3	王舎城 ~ ナーランダー	1	7.5	7.50	15	15.00
1-4	王舎城 ~ クシナーラ (2)	25	245	9.80	345	13.80
1-5	クシナーラ ~ パーヴァー	3gāvuta	11	14.67	12	16.00
1-6	王舎城 ~ 舎衛城 (3)	45	432	9.60	ベアサーリー 経由 / 585	13.00
	同	45	432	9.60	ベナレス 経由 / 649	14.42
1-7	王舎城 ~ カピラヴァットウ (4)	60	350	5.83	693	11.55
1-8	舎衛城 ~ サーケート	6	82	13.67	121	20.17
	同	7	82	11.71	121	17.29
1-9	舎衛城 ~ サンカッサ (5)	30	273	9.10	398	13.27
1-10	舎衛城 ~ アーラヴィー (6)	30	294	9.80	372	12.40
1-11	ベナレス ~ ブッダガヤー (7)	18	213	11.83	254	14.11
1-12	ベナレス ~ コーサンビー	30	163	5.43	175	5.83
1-13	ベナレス ~ タッカシラー (8)	120	1399	11.66	1672	13.93
1-14	チャンパー ~ ミティラー (9)	60	195	3.25	411	6.85
	合 計	433.75	3752.5	8.65	5153	11.88

平均すると1由旬は直線距離で8.7 km、ジグザグコースで11.88 kmとなる。おそらくこの「由旬」はインド国俗の由旬であり、律蔵で用いられた由旬ではないであろう。また度量衡的な絶対スケールとしての由旬ではなく、体感的な由旬であったものと考えられる。このように考えると、11.88 kmを取るべきであって、これは法顕の11.44 kmや玄奘の11.38 kmと極めて近い数字になる。

- (1) 王舎城 - 10 - Giriak - 18 - Bihar Shalif - 31 - Bakhtiyapur (59 km) この一連の文章は王舎城から最寄りのガンジス河の南岸と、ヴェーサーリーからガンジス河のもっとも近い北岸の距離とした。したがってガンジス河の河幅などが考慮に入られていないので、これをプラスしても、王舎城からヴェーサーリーまでの距離にはならない。
- (2) 王舎城 - 107 - Pataliptra - 15 - Hajipur - 35 - Vaishali - 188 - Kushinagara (345 km)
- (3) (第1ルート) 王舎城 - 157 - Vaishali - 188 - Kushinagara - 240 - 舎衛城 (585 km)
(第2ルート) 王舎城 - 49 - Gaya - 10 - Buddhagaya - 254 - Venares - 59 - Jaunpur - 55 - Chanda - 34 - Sultanpur - 60 - Haizabad - 7 - Ayodhya - 121 - 舎衛城 (649 km)
- (4) 王舎城 - 157 - Vaishali - 32 - Muzaffarpur - 58 - Sitamarhi - 43 - Janakpur - 25 - Bardibas - 38 - Lalbandi - 68 - Pothalaia - 26 - Hetauda - 86 - Narayangadh - 120 - Butwal - 40 - Piplahwa (693 km)
- (5) 舎衛城 (Sahet-Mahet) - 46 - Bahraich - 19 - Fakhrpur - 60 - Ramnagar - 53 - Lucknow - 53 - Sandila - 54 - Bilgram - 18 - Kannauj - 54 - Farukhabad - 41 - Sankissa (398 km)
- (6) 舎衛城 (Sahet-Mahet) - 121 - Ayodhya - 66 - Akbarpur - 84 - Azamgarh - 42 - Maunath Bhanjan - 59 - Ballia (アーラヴィーと仮定する) (372 km)
- (7) Venares - 17 - Mughalsarai - 64 - Mohania - 48 - Sasaram - 18 - Dehri - 27 - Aurangabad - 47 - Sherghati - 11 - Dobhi - 22 - Buddhagaya (254 km)
- (8) Venares - 175 - Kaushambi - 229 - Kanpur - 82 - Kannauj - 95 - Sankissa - 172 - Mathura - 84 - Palwal - 60 - Delhi - 29 - Bahandurgarh - 43 - Rohtak - 52 - Jind - 38 - Narwana - 95 - Mansa - 49 - Bathinda - 28 - Jaito - 15 - Kot Kapra - 13 - Faridkot - 31 - Firozpur - 31 - Kasur - 60 - Lahore - 68 - Gujranwala - 32 - Wazirabad - 15 - Gujrat - 79 - Sohawa - 29 - Mandra - 16 - Riwat - 52 - Taxila (1,672 km)
- (9) Mitila (Janakpurと仮定) - 133 - Vaishali - 35 - Hazipur - 15 - Pataliputra - 48 - Bakhtiyarpur - 45 - Mohameh - 81 - Monghyr - 34 - Sultanganj - 20 - Campa (411 km)

[3] 以上のほか次のような記述も存するが、ここに出る地名が現在のどこかに特定できないことや、その広さが分からないことなどから、資料とすることができなかった。

波斯匿王は所用のためにナンガラカ城に来た。ここは釈迦族のメーダルンバ城から3由旬しか離れていなかった。「だから遠くない、その日に着けるから、世尊の説法を聞きに行け」。そこで王は車を用意させて釈尊に会いに行った⁽¹⁾。

2人して12由旬に亘るバラナシの国を治めようではないか⁽²⁾。

(1) MN.89 vol.II p.119

(2) J.543 vol.VI p.160

[4] その他原始聖典において由旬が使われているケースは、次のように神話的な表現のものばかりであり、我々の今の目的のためには役に立たないので、除外した。

「今此大地深十六万八千由旬」 (1)

「吹散八万四千由旬大海水已」 (2)

(1) 『長阿含経』卷18「世紀経閻浮提州品」(大正01 p.114下)

(2) 『起世因本経』卷9(大正01 p.410上)

[5] ここで以上の都市間距離から導き出された、いわば体感的な「由旬」の長さをまとめておこう。

[5-1] 上記の作業から導き出された結論は、以下の通りであった。

法顕	11.44 km
玄奘 インド国俗換算	11.38 km
パーリ資料	11.88 km

すなわちここから導き出される結論としては、1由旬は約11.5 kmとすることができるであろう。

[5-2] しかしこれらは先に導かれた長さを現す度量衡のユニットから導かれた、インド国俗の1由旬=13 kmとは約1.5 kmほど短くなっている。これをどう解釈すべきであろうか。

おそらくそれは体感的な長さであったからであろう。これらは重い荷物を背負うて旅をする際の感覚から得られたものであるから、たとえば11.5 kmのところを13 kmにも感じるという結果になったものと考えられる。そういう意味では絶対単位としての1由旬=13 kmは蓋然性のある数字といってよいであろう。